定年退職を経験した既婚女性の社会参加の意味付け
The Meaning of Social Participation to Married Women who Have Experienced Mandatory Retirement

藤原　妙子
（桜美林大学加齢・発達研究所）
杉澤　秀博
（桜美林大学院老年学研究科）

要旨

本研究の目的は，定年や早期退職制度で退職した既婚女性が新たな活動の場として社会参加を選択することの意味付けとその形成プロセスを明らかにすることにある．女性７名に対して半構造化された質問項目によるインタビューを行い，その内容を修正版グランデッド・セオリー・アプローチで分析した．明らかになった点は以下の通りである．＜＞はカテゴリー，【　】サブカテゴリーである．【規範としての活動】【回帰の場所としての活動】という＜地域を意識した参加＞と，【家族に縛られたくない】という＜家族関係を意識した参加＞が社会参加の促進に寄与していた．＜家族関係を意識した参加＞には，【家族に迷惑をかけない】という活動を躊躇させる意識も見られた．＜家族関係を意識した参加＞の形成には，現役時代の＜伝統的家族関係を意識した就労＞が，＜地域を意識した参加＞の形成には、現役時代の＜地域との薄い関わり＞が影響していた．

キーワード：女性定年退職者，社会参加，地域関係，家族関係，既婚女性

1.　緒言

1）　問題関心

本研究の着眼点は，少数派であるが，男性と同じように定年まで継続して働いてきた女性における定年後の社会参加にある．性によって定年後の適応プロセスが異なることについて，前田[1)]は次のように指摘している．女性の場合，定年退職後は就業を継続する可能性は低くなるが，生涯つきあえる友人や，それまで培ってきた地域社会との親密な関係を維持している．つまり女性は職業キャリアの継続よりも，友人や近隣などのインフォーマルなネットワーク資源を活用しながら『連続性』を維持していると述べている．これは高齢者の社会参加の内容やそのプロセスが性で異なる可能性を指摘しているといえよう．

2) 高齢者の社会参加に関する研究の到達点と課題

高齢者の社会参加に関する研究については，大きく社会参加の効果と社会参加に関連する要因の２つに区分することができる．

(1) 社会参加の効果

高齢女性に対する社会参加の効果を評価した研究には次のようなものがある．山崎[2]は，社会参加を社会的ネットワークの面から，「選択縁積極型」「友人中心型」「親族中心型」「消極型」の４つに類型化し，その類型による主観的幸福感の違いを分析している．分析の結果，女性では誰とも交流しない「消極型」は他の類型と比較して主観的幸福感が有意に低いことを明らかにしている．今井ら[3]は，ボランティアの効果について，介護予防事業に応募した中高齢者ボランティア (60 歳から 64 歳 286 名) を対象として評価している．アウトカム指標には，健康関連 QOL を用いている．分析の結果，女性では，ボランティアを新たに開始することによって，健康関連 QOL のうち身体機能面と情緒適応面の改善が有意であったことが明らかにされている．以上のほか，社会参加の効果が性によって異なることを解明した研究もある．宍戸[4]は，高齢男性の幸福感は配偶者の存在を軸とする家族領域に影響を受けやすいが，高齢女性の幸福感は夫の就労状態に加えて，地域組織への参加や家族以外の人と行う余暇活動によって影響を受けていることを明らかにしている．以上の研究は，高齢女性の職業キャリアによる違いには言及していないが，高齢女性の場合，友人との関係や地域活動への参加が健康度や幸福感を高めることに貢献していることを示唆している．

(2) 社会参加の関連要因

ここでは，社会参加の関連要因について，性差を意識した研究を取り上げる．木村[5]は，都市かそれ以外かによる違いは多少あるものの，女性の場合，学歴が高く職業を持たない人ほどボランティアや消費者活動などの社会活動に参加していることを明らかにしている．三徳ら[6]は，男女ともに旅行・行楽に行っているか否かが社会参加と関連が強く，女性の場合は趣味活動の有無とも関連が強いことを明らかにしている．趣味活動が女性についてのみ社会参加と関連が強かったのは，女性の場合趣味活動を行う目的が情緒的な一体感を求めてという場合が多く，そのため趣味活動が社会参加につながりやすいのではないかと述べている．以上のように，男性と女性では社会参加に関連する要因に差が見られることが示唆されている．さらに，女性の中でも専業主婦であった人と就業経験のある人の違いに着目した研究が岡本ら[7]によって行われている．地域における活動をしたいと思っている人の間では，専業主婦であった高齢者の方が，就業経験のある高齢者よりも活動への参加割合，すなわち活動意向の充足度が高いと述べている．この指摘は，就業していた女性の場合，就業していた時だけでなく，退職後においても社会参加への障壁を抱えていることを示唆している．

(3) 既存の研究における到達点と課題

以上のように，既存の研究では，高齢女性においても社会参加が健康や幸福感に効果があること，社会参加に関連する要因については性差があることが示唆されている．高齢者は年齢によって定義づけされているが，その集団は一様ではなく，性別はもちろんのことライフコースによっても高齢期の社会参加の様相は大きく異なると思われる．ライフコースに焦点をあてた場合，本研究で着目したように，女性では職業キャリアの影響が無視できない．それが現役時代の家庭や地域に少なからず影響しているだけでなく，高齢期における社会参加のありようにも影響している可能性がある．しかし，現役時代の職業キャリアおよびその家庭生活や地域生活への影響との関連で高齢期における社会参加のありようを分析した研究は少ない．

さらに，社会参加の効果や関連要因に関する研究では，量的データの解析に基づく分析が多い．つまり，研究者が客観的な枠組みを設定し，それによって高齢期の社会参加の効果や要因を探ろうというものであった．しかし，社会参加の効果にしろ，関連要因にしろ，客観的に測定された指標だけでは十分にとらえることはできない．高齢期における社会参加に関する理論枠組みが十分に構築されているとはいえない現状にあるといえよう．三徳ら[6]は，高齢期における社会参加推進のためには質的研究が必要であると指摘している．女性高齢者が健康を保つためには，参加をどう促すのかが決め手となると考えられる．そのためには，参加に対してどのような認識を持っているのか，いかにしたら参加できるのか，すなわち女性高齢者自身の社会参加に対する認識を明らかにしていくことが効果的な介入施策を提示していくために必要であると述べている．秋山[8]は，本人が主体的に選んだ「不参加」についてもその人の内的世界を踏まえて理解する必要があると述べている．見方を変えれば,「参加」を選択した人の内的世界を捉えることは「不参加」を選択した場合の内的世界の理解にもつながるといえよう．以上のように，高齢期における社会参加の効果や要因を分析する理論を構築する手がかりとして，当事者の内的世界を理解する質的な研究が必要となる．しかし，社会参加を含め高齢期における適応のありようやプロセスを定年前の職業キャリアとの関連で解明した質的研究は少なく，男性を対象とした西村[9]や篠田[10]の研究，定年退職した女性を対象とした徳田[11]の研究，男女を対象とした片桐[12]の研究等いくつか見られるのみである．

3) 本研究の目的

本研究の目的は，長い間フルタイムで働き続け，定年や早期退職制度で退職を経験した既婚女性が，新たな活動の場として社会参加を選択することの意味づけとその形成プロセスを明らかにすることにある．このプロセスを検討するに際には，定年退職以前の職業キャリアをいかに遂行したかだけでなく，定年前の家族や地域における役割はどうであったといった点も重視する．

2. 研究方法

1) 社会参加の定義

社会参加には，就労や私的な対人交流，個人的に行う社会文化的活動等も含む広義の定義があり，テレビや新聞視聴あるいはネット上の書き込みやチャット参加なども含まれるとするものがある．しかし，本研究における定義はより限定的なものとする．杉原[13]は，社会参加とは他者と関わりをもつ，ある程度継続的でフォーマルな活動であると定義している．本研究では，この定義を参考に，社会参加について，就労を除き，組織に帰属して行う活動に参加している，すなわちフォーマルな活動に参加していることとした．活動の目的には，社会貢献的，政治的，自己完結的なものがあるが，その種類は問わない．

2) 対象者

調査対象は，定年や早期退職制度によって退職した経験（以下，定年等による退職）のある 55 歳以上の既婚女性 7 人で，下記①～③の条件すべてに合致する人であった．①退職後から社会参加活動を始めた女性，②調査時点で就労していない人（就労を考えている人も含む），③東京都およびその周辺の都市に居住する人．③については，調査の利便性を考えてのことである．早期退職優遇によって退職した人を含めたのは，定年退職の事例が少なく，十分に分析できる例数を確保することができなかったからである．ただし，分析に際しては，定年退職者との違いを意識することとした．定年や早期退職によって退職する以前の職業の種類については，結果の普遍性を図るためできるだけ異なる職業を選んだ．対象者の抽出は，筆者の友人・知人のネットワークを通じて行った．

表 1　対象者の特性

番号	年齢	定年退職・早期退職した職業・仕事内容	勤続年数	退職年齢	退職理由	同居者	別居子	婚姻経験	学歴
A	64	会社・取締役	24 年	60	定年	夫	2 人	あり	大学
B	56	保育園・保育士	30 年	55	早期退職	夫，子 2 人	なし	あり	専門学校
C	61	郵政省・事務	40 年	58	早期退職	夫，子 1 人	1 人	あり	高等学校
D	63	大手銀行・事務	24 年	57	定年	夫，子 1 人	1 人	あり	高等学校
E	63	看護士・師長	38 年	60	定年	夫	2 人	あり	専門学校
F	62	市役所・事務	48 年	58	早期退職	夫	2 人	あり	高等学校
G	61	組合病院・事務	34 年	55	早期退職	夫	1 人	あり	専門学校

3) 調査方法

調査方法は，半構造化された質問項目を用いたインタビューによる調査であった．すなわち，インタビューに際しては，定年等による退職後の社会参加が各対象者の中でどのような意味づけがなされているか，その活動がどのようなプロセスから選択されたのか等に関するデー

タを収集できるように，事前に主要な質問項目を用意した．主要な項目は以下の通りであった．①退職理由とその前後の気持ちや準備行動，②退職後の過ごし方（社会参加活動，その他），③社会参加活動をしようと思ったきっかけと始めた時期，④社会参加活動をして良かった点，⑤今後，社会参加活動をどれ位続けていきたいか，その理由は何か，⑥社会参加活動に割いている時間や生活全体に占める割合，⑦家族の協力や理解，夫の社会参加活動．質問の順序は話の流れによって変え，全体として質問項目が満たされるように対応をした．

面接は，対象者の希望に従い，対象者の自宅や執筆者の所属する大学のプライバシーが確保される部屋等で行った．面接時間は平均1時間程度であった．面接した内容は同意を得た上でICレコーダに記録した．調査期間は2009年12月から2010年6月であった．

4）分析方法

分析方法には，木下[15) 16)]の修正版グラウンデット・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach）（以下，M-GTA）を用いた．GTA研究の先駆者に敬意を称してModifiedと名づけたとされるが，M-GTAは木下のオリジナル版である．この分析方法を採用したのは，質的な分析方法の中では分析手順が定式化されていること，さらにその方法論的特長から本研究のようにプロセス的なものを対象にした課題に適合的な分析方法であると考えられたためである．分析テーマは「女性の社会参加を選択することの意味付けとその形成プロセス」とし，分析焦点者は「定年等による退職を経験した既婚女性」とした．

分析手順は以下の通りである．ICレコーダに記録した面接データを逐語録に起こした後，そこから抜き出した社会参加の意味付けやプロセスに関する文章をバリエーションとして分析シートに表し，概念を生成していった．生成された概念を踏まえ，サブカテゴリー，カテゴリーの生成およびその関連性について分析した．以上の一連の作業は，質的研究の経験が豊富な研究者のレビューを受けながら行った．

5）倫理上の配慮

本研究では，対象者の自由意思による研究への参加，対象となる個人の人権の擁護のための配慮（プライバシー．苦痛．危険性）を徹底させた．対象者の自由意思による研究への参加については，研究の目的，方法，データの公表について書面で説明した上で，研究協力への同意を得た．対象となる個人の人権の擁護のために配慮した点は次の通りであった．①対象者の希望する場所でインタビューを行う，②収集された記録は厳重に保管・管理する，③記録にはイニシャルを用い個人が特定されないようにする，④逐語録を作成する際には固有名詞は記号化し，公表に際しても個人が特定されないようにする，⑤本人から請求があれば当該データを開示する，⑥調査で知り得た情報については一切外部に漏らさない．本研究は桜美林大学倫理委員会の承認を得ている．

3. 結果

1） 全体ストーリーライン

図１は，分析の結果生成された概念をカテゴリーにまとめ，その関係性を図式化した概念図である．＜　＞はカテゴリー，【　】はサブカテゴリー，（　）は概念，⇨はカテゴリー間の関係性の方向性を示している．以下，概念図に沿ってストーリーラインを記す．

分析対象者が仕事を継続せずに辞めた理由には，定年がきたのでやむなくという場合と，仕事に限界を感じたり，老親の介護などで早期退職制度を利用して退職せざるを得なかった場合とがあった．しかしながら，仕事をしている間には考えられなかった新しい関係性を意識しながら，全員が社会参加を行っていた．定年等による退職という大きなイベントを経験した後でも，とどまることなく次なる道を探し，社会に適応しようとする姿があった．

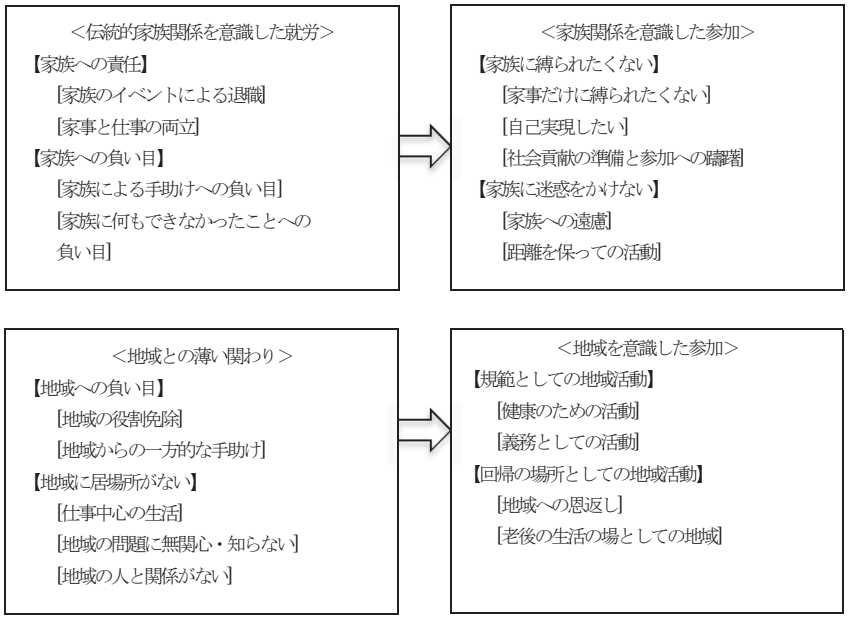
対象者が仕事をしていた時代は，男女の役割分担が固定化されていた保守的な時代であり，＜伝統的家族関係を意識した就労＞（【家族への責任】【家族への負い目】で構成）であった．すなわち，【家族への責任】を果たしながら，仕事を続けていくことは大変なことであったと思われる．仕事を継続するには，母や夫による手助けが必要であり，子どもとのかかわりも犠牲にせざると得なかった．このような母や夫による手助けを申し訳ないと思い，子どもと十分にかかわってやれなかったという意識が【家族への負い目】として存在していた．

現役時代の生活は，＜地域との薄い関わり＞（【地域への負い目】と【地域に居場所がない】で構成）で特徴づけられた．【地域に居場所がない】とは，[仕事中心の生活] で，[地域の問題に無関心・知らない] 状態であり，[地域の人と関係がなかった] ということであった．このような状況下では，自分から社会参加に足を踏み入れるのは躊躇せざるを得なかった．

社会参加を躊躇させるような意識があるにもかかわらず，なぜ社会参加へと一歩踏み出したのであろうか．そこには，＜家族関係を意識した社会活動＞（【家族に縛られたくない】と【家族に迷惑かけたくない】で構成）という家族が大きな存在として位置づけられていた．長い間，家事をこなしつつ，外に出て仕事をすることが当たり前になっていた女性は，家族を意識しながらも，家族という枠の中に納まっていたいとは思わない．伝統的な家族関係を保ちながら，現役時代と同じように退職後においても【家族に縛られたくない】と思っていた．彼女たちにとって，現役時代は仕事を行いながら家事をこなしていたのだから，退職後において一日を家事だけで過ごすのはもの足りなかった．まだまだ心身ともに老いるほどの年齢ではなく，何か活動したり，就労する元気も十分残っていた．しかし，他方では，前述のように【家族に迷惑をかけない】，とりわけ夫との関係性を念頭に置きながら，退職後間もなくは，趣味を楽しんだり，社会参加の準備をしたりしていた．

現役時代は，地域に関わらなくても，仕事という場に自分の拠り所を見出すことができていた時でもあった．しかし，仕事をやめた今振り返ると，地域は子供が小さいときお世話になったり，当番を免除されたりして，陰に陽に面倒を見てもらった，すなわち【地域への負い目】もあり，[地域への恩返し] という気持ちがわいてきた．その上今後も住み続けなければなら

ない場所であり，[老後の生活の場としての地域] が必要であることに気づかされた．このように【回帰の場所としての地域活動】という主体的な選択と同時に、今まで働いていたことで免除されていた町内会役員等の仕事の依頼も断れなくなり，[義務としての活動] を意識する，あるいは [健康のためにも活動] をしなければというように，退職後の社会参加は【規範としての地域活動】という多分に心理的強制を伴ったものでもあった．



注) ＜＞；カテゴリー，【　】；サブカテゴリー，[　]；概念，⇒；影響している方向性

図１　概念図

以下，カテゴリー，サブカテゴリーごとに具体例を示しながら分析結果を記述する．具体例については『　』で示す．（　）内のアルファベットは対象者を示し，対象者一覧表と対応させている．

2)　現役時代の＜地域と薄い関わり＞から退職後の＜地域を意識した参加＞への変化

仕事を持つ女性にとって，地域は目を向けたくても向ける余裕のなかった場所であり，目を向けなくても済んだ場所であった．対象者の中で，現役時代から地域とある程度関わっているという意識を持った人はＣさんだけであった．子どもの少年野球を通した親同士の付き合いが現在も地域の中で継続していた．夫の趣味である釣り仲間の付き合いとも関係しながら，地域の人たちと楽しいコミュケーションが広がっていた．多くの対象者の中にある〈地域と薄い関わり〉しか持てなかったという意識，すなわち【地域への負い目】や【地域に居

場所がない】という意識は，退職後＜地域を意識した参加＞すなわち【規範としての地域】【回帰の場としての地域】に向かう．

【規範としての地域活動】とは，現段階での参加意向がどうであれ，地域に関わらなければいけないという規範が働くことである．それはセーフティネットとしての意識だったり，自分の健康観への意識からだったりと位置づけはさまざまであるが，仕事中心の生活であった現役時代における [地域の役割免除] や [地域からの一方的な手助け] という【地域への負い目】が，地域に関わらなくてはという【規範としての地域活動】に関係していた．以下がその具体的な発言である．

『(A) やはりうちで入り込むと一番地域っていうのがあの，なんかいろんな事でお知り合いにならなきゃいけないとか，なにかあったとき遠くの親戚より近くじゃありませんけど，やっぱり地域でね，仲良くっていうか，顔見知りになっておかないといけないなって，それは仕事をしている時からずっと思ってはいたんですね』『(B) 地域とつながりたいっていうのは，なんかあのやっぱり私はこの地域で生活してる訳なので，その仕事，なんて言うんだろう，ここで根付きたいという気持ちはすごくあって』『(C) 多分自分がね，どうなっていくかわからないんですけどね．それはこっちに置いといてね．また別問題という事で，やっぱり何らかの形でうーん地域に関わっていければといいかなって言う風に思っています』『(G) まあ班長さんになっても必ずやらなくてはいけないと言うことはないんだけども，やっぱり自分は職も離れているし，やれないとかじゃなくて，やらなくちゃいけないなっていう感じでやってきました』．現役時代は地域との関わりが薄かったため，退職後，改めて地域に目を転じた時，地域の現状に驚く．

『(E) 町内会やるようになって，今まで近所にそんなにたくさん高齢者がって言うのはびっくりしちゃいました』『(E) 理事になってそのいろいろな敬老の日の行事とかありますよね．ああこんなに (高齢者が) たくさんいるって，知らなかった』『(G) せっかく近所にいるはずなんだけども，顔ぶれもちょっとね，知らない顔ぶれの初めての顔もいっぱいいたしね』．これらの発言からは，地域に入ってみたら思いもかけず高齢者が多かったことに驚く様子が伝わってくる．地域に入ったからこそ地域の現状がわかるのである．

＜地域との薄い関わり＞しか持たなかった場合でも，退職後に自分の住む地域を考えた時，地域は自分にとって【回帰の場としての地域】であることに気づく．今後住み続けていかなければならないこの地域が，自分にとって最後のよりどころとなる場所であるという意識である．それは次のような発言に現れている．

『(B) なにかあったとき遠くの親戚より近くじゃありませんけど，やっぱり地域でね，仲良くっていうか顔見知りになっておかないといけないなって』『(B) こないだ私すごく思ったんですけど，あの三階の方がちょっとあの階段で倒れられてて，たまたま私が帰って来て，でも私一人の力ではどうしようもなくて，それであのもう男の方でしたので，なんとかしようと思って知り合いの方に電話をかけて，たまたまうちに居たからね，で，その男の方と息子がたまたま帰って来てその方といっしょにふたりでこう三階まであがって．そういう時に

ふと思ってこれが地域とつながっていたからその奥様が私に声をかけて下さって，大変なんです助けて下さいって．なんかそういう時に全く逆の立場だったら，まったくこう孤立している時に誰に助けを求めればいいんだろうってすごく思いましたね』『(D) もうちょっと子供たちが大きくなって，また私が手が空くようになったらお手伝いさせていただきますって言ってたのがずっと定年まで来ちゃったので，自分の中では良くしてもらったという思いがあるので，お返ししなきゃという思いがあって，わりとすんなり（注：役員を）引き受けられて』

3) ＜伝統的家族関係に縛られた就業＞から＜家族関係を意識した参加＞へ

定年等による退職を経験した対象者は，伝統的な家族関係を引きずりながらも，退職後は趣味やボランティア，就労準備にと活動していた．対象者たちが結婚した 1970 年代は，保守的伝統的な家族関係が営まれていた時代であった．そのため，家族に何かと助けてもらった，家族に対して何もしてあげられなかったという【家族への負い目】を現役時代に意識せざるを得なかった．このような意識は，退職後の現在も継続しており，【家族に迷惑かけない】ことが社会参加活動を選ぶ際の前提となっていた．この【家族に迷惑をかけない】は，［家族への遠慮］［距離を保っての活動］の２つの概念で構成されていた．［家族への遠慮] の具体的な発言は次のとおりである．

『(A) あのう，まあ何でも引き受けてくるねとかいって．でも特別に，あのぐつぐつまあ別にああそうと言う感じで，自分が好きならやった方がいいんじゃないかと』『(C) あの割と出来るところを応援してもらったりしてますけども．ま，いいねっていうか，うんそうですね，楽しそうだねって言ってますねよく．ええ』『(F) あのやる事は賛成だ，まあやる事をちゃんとやれば多分いいと思うんですけど』『(G) 応援と言う積極的なあれではないけども否定はされないっていうか，好きなようにっていう言い方ではないけども』．ここには，自分に迷惑がかからない程度の活動ならやってもいいよ，という夫の本音が見える．他方，まれではあるが，E さんの夫は妻の退職を機に伝統的家族関係からの脱皮を試みている．『(E) 食事も主人と一日おきに交代で作っています．それも私からじゃなくてあの向こうから．もう家にいるんだから対等だよねって』．

［距離を保っての活動］については，次のような発言が例である．『(A) 地域の方も，あのどんどんどんどん活動するとまあ地域っていうのはどんどんどんどん増えてくるのがあると思いますので，それはまあ頼まれたら少しはやると思いますけど，それにのめり込んでやるという事はないとは思うんですね』『(G) ボランティアは強制じゃなくて，そのノーと言えるボランティアを皆さんやりましょうって．まあそういうのを自分勝手ないい方に解釈して，私もまたノーと言えるボランティアをやっているっていうか』『 (G) なんかあればなあって，自分のこの年代に合った無理なく出来るなんかあればってそれはいつも（注：情報誌を見て）思っていますね』．

ここに見えるのは過重負担ではない，時にはノーと言える無理のない活動が望ましいとい

う意識であった．十分働いてきた自分が今さら活動にのめりこめば，ようやく獲得した自由を束縛され，家族にも負担を強いることになる．それは受け入れ難い活動なのである．

4）【家族に縛られたくない】を求めて

男性に伍して働いてきた女性には理不尽に抗う進取の気性もある．それが【家族に縛られたくない】であった．退職を迎え，余生と言う言葉が頭をよぎるとき，【家族への責任】はまっとうした，このまま家に縛られたくはない，今まで出来なかったことを思うがままにしてみたいと思うのである．

このサブカテゴリーは，[家事だけに縛られたくない][自己実現したい][社会貢献の準備と参加への躊躇] で構成されていた．以下は発言の具体例である．

(1) [家事だけに縛られたくない]

『(A) 日々毎日家に居てもそれほどは仕事もないですしね，っていうのがあるので，まああとは基本的に外に出るのが好きっていうのがすごくありますので』『(B) あの，うちにちょっと居てみたんですけど，午前中こう家事をだいたいまあ終わって，なんか午後になると落ち着かなくなるんですよね』『(B) いやーそうですね．まだまだね，あのこうのんびり専業主婦だけで，専業主婦の方もすごい大変だと思いましたね，今回ね．本当に家に居るとなんか私は専業主婦に向いていないなあって思いますね』『(C) もし仮に何もやらないでこうね，家の家事，夫の世話とか家の家事だけになってしまったら，うーんつまらないと思うんですよね』『(E) ああやっぱり私もあんまりこう家庭の事をこうやるっていうよりも，やっぱりこう社会と関わりを持ちたいと思っていましたから』『(F) あの５時までとかそういういっぱいじゃないから９時半頃出て行って，まあ３時位には終わるんですよ．だからそんなあの，それで買い物して帰って来てお料理してちょうどいい』．このように退職後の自由時間を過ごすのには，家事だけでは物足りないのである．

『(A) でも周りの人は，○○さん大変でしょう，もう毎日毎日ね，よく疲れないとかよくいわれるんですよね．よく疲れないわねとか，でも全然疲れるって言う事がないんですよね．外へ出るのは好きなんですけども』『(B) まあ外に出た方が自分は元気になるかなあ，お家に居るとちょっと元気無くなるかなって気はしますよね』『(E) うち，主人はあのパソコンとかに向かってれば一日中家に居て平気な人なので，あの私はやっぱりどっちかというと外に行っちゃう人なので』『(G) うちで黙っていられないんだね，ずっと外に出る仕事をしていたからからね』．定年退職女性は退職前においては家事と仕事との両立を苦労して図ってきた．それが仕事がなくなった今，家事だけでは物足りなさが残る．

(2) [自己実現したい]

様々な方向での自己実現があった．活動にキャリアを生かすという自己実現に関しては，次のような発言があった．『(B) 話を聞いてあげられるかなとか，なんか私の知り合いのつ

てを辿って，こういうとこがあるよって教えてあげられるとか，今までの経験からなんかもうちょっとこう還元出来るかなっていう思いはありますよね』『(E) あの老人って，どうしても医療的な部分はこれからあるじゃないですか．だからそういう時に自分で経験した事が，こう判断したりとかなんか実技を生かせるかなって』『(E) ああやっぱり医療を経験していると，こう例えば 70 の人の老い，80 の人の老いってこうなんかイメージがつくんです．あとはなんかこう痛みと言うのは介護の人達はわからないので痛みがあるこの人に，どう言う風にこうえーと支援していくかって言う時，私だと医療従事者だったので，まずその痛みを取るにはどうするかって考えるんじゃないですか』『(E) それが介護だけの人達だけだとそれがなんか援助する事ばっかり考えちゃってね，それからまあ看護を経験してきているのでそうじゃないって言う気もちがあるので，そういう事では他のケアマネさんよりはちょっと生きているなあって』.

新しいことに挑戦し，自己の力を試すという自己実現については，A さんと B さんの発言がある．『(A) ひとまずは、最終的に (回想法や町内会活動に) どこがどのように関われるかわからないけれども、たぶん自分がどこの範囲まで出来るのかということをちょっと試してみた方がいいかなって』『(B) あと 65 歳まで働くとしたら 10 年ありますよね．55 で辞めれば．でも 60 で辞めちゃったらそこから何かしようと思っても出来ないっていう思いがあって』．E さんは生活介護施設事業所を起こそうとしていた．どこまで自分だけの力でやれるか試そうと，厚生労働省や法務局の手続き書類と格闘していた．『(E) 今それを起こすために人の手を借りるのではなく，自分でこう調べながら迷ったり失敗したりしながらその事業を起こしたいなあって』と意欲旺盛であった.

(3) [社会貢献の準備と参加への躊躇]

今は好きな趣味や活動をしながら自己実現を図っている対象者も，いずれもう少し年を重ね，適度な貢献活動が見つかったらそこに足を踏み入れてもいいと思っている.

『(A) たまたま地域の福祉施設みたいな，あの高齢者施設に行ってあの（回想法を）やらせていただいた時に，やはりあのお年寄りの方達が，ほんとに元気を出して今まで喋らなかった人がちゃんと話すようになったとか，笑顔が見られるようになったとかっていう，その流れを体験していましたので，ああそういう事をやらなければいけないかなあとは思っているんです』『(B) あとはほんとにこう地域の中で私たちが (注：お年寄りの) お役に立てるような事はなるべくしたいなあっていうのは思ってますけど』『(E) こう共に例えば生き方とかね，あの老いていく人達に共にこう関わりながら，自分もこれから老いていく訳ですから，あの自分の人生も考えながらその人達の人生も考えて，あのずっとライフワークとしてケアの仕事がしたいと思っていたんです』.

しかしながら，地域とかかわりが薄く，老いと関わる地域活動に興味はあっても定年退職女性にとっては敷居の高いことであるに違いない．そこでいったん学びなおしてから活動に飛び込もうと言うのが, 社会参加するために学ぶことであった.『(A) もともとは地域デビュー

に誘われて、それからあのうそれから回想法のデビューを同じ方だったんですが、回想法の講座っていうのもありますよということで』『(C)（注：認知症サポーター）養成まではいかないんですけど．うーんなるたけそういう講座とかがあったら行くようにして，ええ．養成みたいなのに行ければ良かったんですよね．なんか忙しくって行かなかったりして．今週またあるんですよね，あの区の主催のがあって，それに応募して』『(E) 私は１年前から，あの始めからもうケアマネの資格を取ろうと，まあどっちにしてもすごい仕事はハードだったので，ちょっと１，２年でケアマネの資格を取って』．学ぶことは自分探しや生きがい探し，自分を高めること，自分を試すと言う意味づけを持つだけではなく，ボランティアへの参加動機を高めることでもあった．

しかし，退職間もない人の場合には，以上のような準備をしつつ，今はまだボランティアはしたくないという意識もあった．地域と関わることは貢献活動をすることと捉えるものが多かった．この場合の貢献活動とはすなわち無償のボランティアであり，働いた対価としての報酬を得てきた彼女達にとって心理的な抵抗が少なくなかった．無給なだけに強い情熱や主催者の強い求心力，あるいは動機といったものがないとすぐには飛びつけないものであった．

『(B) あの経済的にすごく余裕があったら，もうちょっとボランティア的な事をやったかもしれないですね』『(B) あの町内会のお手伝いしてくれない，なんて言われた事もあるんですけど，やっぱりこう働き続けて来たっていうのはこう町会の婦人部とかには目がいかないですね』『(E) 私はもう生まれが貧しかったのでどうしてもね，ボランティアはなじまないですよね.』．B さんの発言で浮かびあがったのは，無償であることへの違和感，地域で活動している女性達が主婦であることへの違和感であった．これらの意識のずれが，活動に容易には溶け込めないといった活動への参加を躊躇させる理由となっていた．

ボランティアへの抵抗感はまた別のところにもあった．それは，ようやく得た自由な時間や開放感を束縛されるような不自由なことには使いたくないという理由であり，これが以下の発言から透けて見えた．発言者 C さん，D さんは介護を終え，F さんは現在も介護をしている人であった．『(F) 何時あのまあ今までも２回してるんですよ（注：脳梗塞），それであの付き添ったりなんかするちょっと母のこともあるし，まあ（注：ボランティア）出来ないことはないんだけれども．ちょっとそのスポーツ倶楽部とか行っていると暇もないですね，あまりね』『(D) 私なりに両親を送ったんだし，（社会貢献は）いいかなって．子供にもその姿を見せているんでね』『(D) だから今，社会貢献，だから今これから出来ない事はないけど，今，手が結構，遊びの，自分の発散しようと言う事で，まだそういうそこまでいってないわね．目一杯元気なときに（注：趣味を）やりたいなって言うのは本当にそんなところかしら』．二人ともボランティアは目下眼中にはなく，とにかく発散と休養が大事であった．実母の１年間の介護はとても充実していたという C さんはすでに介護の疲れが取れていた．

『(C) 地域の方ですか．地域の方でそうですね．まあある程度年いったら，近くの診療所で，ええ，まあちょっと関わってもいいかなって言う風には思っている部分はあるんですけど，

それが何歳くらいになってからって言うのはちょっと予測はつかないんですけど．ただ何ですかね，あのあんまり年を取ってからだとまた厳しくなってきますから』．Cさんのこの発言は，いずれボランティアにかかわりたい意思も見え隠れはするが，まだボランティア年齢には達していない，今はまだボランティアにはかかわれないというのであった．

4. 考察

1） 本研究の成果

（1）全体的に

高齢男性の社会参加の有り様は，職業キャリアの中で培われたネットワークやスキルなどを活用する活動に取り組む，つまり職業キャリアを何らかの形で引きずるパターンが中心部分を占める．そこでは，現役時代の地域や家族との関係性はほとんど登場しない．本研究においては，定年等による退職を経験した既婚女性の社会参加の意味づけが現役時代の家族との関係性，地域との関係性により左右されること，加えて退職後の家族や地域との関係性の中にも位置づけられることが示唆された．

本研究の対象者の現役時代は，岡村[14]によれば，1970年代の中ごろまでは，妻として家事労働に従事し，母として子供を養育し，主婦役割を遂行するというライフスタイルが，男女ともに受け入れられていた，とされる時代である．核家族化は進んでいたものの，まだ義父母が同居しているのも当たり前の時代にあって，女性は妻，母の役割のみならず，嫁（主婦）として家庭で働くことが一般的な時代であった．いきおいこの時代に女性がフルタイムで働くことは家族間の関係を考えることなしには語れない．女性がフルタイムで働くことは家族を養い，家族に楽しみを供与できるものであるのに，夫や義父母に支援を受けた場合には，それに対して負い目を感じてしまう．本研究の対象者は，このような伝統的な家族規範が色濃い時代の中で職業キャリアを継続してきた女性である．本研究では，職業キャリアを積んできた高齢女性が現役時代もその規範の影響を受けていたとともに，退職後において社会参加する際にも，このような規範が影響を与え，活動に積極的に取り組むことを躊躇させていることが示唆された．

以上のように家族とのかかわりで高齢女性の活動の規制が図られることについては，既存の研究でも明らかにされている．しかし，本研究では，現役時代の地域とのかかわりも定年退職後の社会参加活動の意味づけにとって重要であることが新しく示唆されている．すなわち，現役時代の【地域への負い目】や【地域に居場所がない】といった＜地域との薄い関わり＞が，定年後の地域を意識することの大きな動機付けとなっていた点である．以下では，家族を意識した参加活動と地域を意識した参加についてより詳細に考察する．

(2) 家族関係を意識した参加

社会参加の意味づけとしては，【家族に縛られたくない】ことが参加する上での重要な内発的動機になっていた．伝統的家族関係の中で仕事との両立を迫られ，また，ある人は家族介護によって仕事を中断せざるをえなかった．【家族に縛られたくない】という中には，[家事だけに縛られたくない] というように，社会参加に直接の目的があるというよりも，外出のための手段としての意味づけが強いものが一部あった．しかし，ほとんどは，[自己実現したい] という意欲をもって積極的に社会とかかわっていこうとしていた．このような意識は全面的に家族から開放されたいという意識ではない．家族の支援を受けながら職業生活を続けてきたことに対する【家族への負い目】を退職後も引きずっている．つまり，社会参加に際しては，家族に迷惑をかけないことと家族に縛られたくないこととの相克の葛藤がある．伝統的家族関係は役割分担を終えた今となっては，相対的にその比重が低くなるといえ，高齢期においても継続しているのである．

(3) 地域を意識した参加

仕事をしている間，意識から遠くにあった地域が意識されるようになると，住んでいる地域と薄い関わりしか持ってこなかったことに気づく．【地域への負い目】や【地域に居場所がない】といった現役時代の地域への意識が【規範としての地域活動】に向かわせる．最初のうちは，地域に関わらなくてはという [義務として地域活動] であったとしても，意識的に周囲を見渡すと高齢者が多いことに気づかされる．とりわけ守るべき立場の高齢者が多いということが，さらにその義務感を強くさせる．以上のことはあくまでも地域との関わりができるというレベルのことで，実際に地域で積極的に活動するということには至らない．

実際の地域の活動に踏み出せないのは，＜家族関係を意識した参加活動＞における [社会貢献の準備と参加への躊躇] が背景にあると思われる．社会貢献の必要性を感じ，社会貢献活動を開始するためのネットワークやスキルの開発を試みるものの，「無償ボランティアはなじまない」「もっと自由を謳歌したい」ということが社会貢献活動を躊躇させている．定年退職後の社会参加の移行について徳田[11] は，男性の場合，定年後の生活に移行するのにはかなりの努力を要しているが，女性はすんなり適応し，自然体で楽しんで暮らしている，と述べている．本研究では徳田の知見が一部支持されたものの，地域への移行がスムーズにいかない場合もあり，そこには女性の職業キャリアとしての経験が色濃く反映していることが示唆された．

2) 本研究の限界

第 1 に，分析対象者が制度上の定年を経験した者ばかりではないという点である．分析の結果，定年間近で早期退職をした人と定年退職した人の間に，社会参加に関わる意味づけに違いは見られなかった．しかし，定年退職を経験した人のサンプル数を増やし，本研究の知見の妥当性を確認していくことが必要である．第 2 に，対象者の多くが定年退職後間もない

人たちであったという点である．退職後 5 年以上経過した場合には，[社会貢献の準備と参加への躊躇] の人たちが，積極的な参加活動へ移行している可能性があるため，本研究で導き出された概念図とは異なるものが生成される可能性がある．佐藤[17] は，女性の場合，55 ～ 64 歳の人と比べて 65 ～ 74 歳の人の方が，「他人や社会の役に立っている」「生活のリズムやメリハリ」「心の安らぎや気晴らし」「自分自身の向上」の項目で，生きがいを感じている人の割合が高いことを示している．このことは，本研究の対象者が今後生きがいを求めて社会参加することを示唆しているといえるだろう．第 3 には, 対象者が公務員や医療技術者といった女性が職業キャリアを継続しやすい職業階層に属していた人が多かった点である．大卒者で民間企業のホワイトカラー層といった，女性がキャリアを継続し難い職業階層出身の女性を選択的に選び出し，本研究の課題の解明を図ることで，本研究の知見の妥当性の検証や修正を行っていく必要がある．

謝辞

本研究を行うにあたり，調査に快くご協力いただきました女性定年退職者の皆様に，心よりお礼申し上げます．また，研究を支えて下さいました本学大学院の長田先生，芳賀先生，ゼミ研究生の皆様に深く感謝を申し上げます．

文献

1）　前田信彦：定年退職への移行と生活の質（Quality of life）- ジェンダー比較分析 -．立命館産業社会論集，第 41 巻 第 1 号（2005）
2）　山崎幸子：高齢者の主観的幸福感に及ぼす社会関係の影響．人間科学研究，18，Supplement（2005）
3）　今井忠則．山川百合子．間中麻耶 ほか：地域中高年者が社会貢献性のある役割を新たに獲得することによる健康関連 QOL の変化 - 予備的検討．茨城県立医療大学紀要　第 13 巻，83 ～ 90，（2008）
4）　宍戸邦章：高齢期における幸福感規定要因の男女差について -JGSS-2000/2001 統合データに基づく検討 -．大阪商業大学比較地域研究所（2011）
5）　木村好美：高齢者の社会活動への参加規定要因—社会活動に参加する人．しない人．1999 年報人間科学，大阪大学大学院人間科学研究科社会学 人間学 人類学研究室．20，309-323
6）　三徳和子．高橋俊彦．星旦二：高齢者の健康関連要因と主観的健康感．川崎医療福祉学会誌 15，No 2，411-421（2006）
7）　岡本秀明．岡田進一．白澤政和：在宅高齢者の社会参加活動意向の充足状況と基本属性等との関連．生活科学研究誌 2（2003）
8）　秋山弘子：高齢期における社会参加．新老年学，第 3 版（2010）
9）　西村芳貢：サラリーマンの職業的引退とその後のライフスタイルに関する質的研究．桜美林大学院老年学科 修士論文（2010）
10）篠田さやか：大都市における定年退職ホワイトカラー男性の地域社会への適応プロセス．桜美林大学院国際学研究科老年学専攻 修士論文（2008）
11）徳田直子：女性定年退職者は退職後の生活において職業経験をどのように意味付けているか．老年学雑誌，創刊号：39-53（2011）
12）片桐恵子：定年退職者の社会参加に関わる 3 つの志向性 -M-GTA を用いた定性的分析，日本興亜福

社財団社会老年学研究所（2006）
13）柴田博．長田久雄．杉澤秀博 編 老年学要論．老年学初版，杉原陽子：社会参加 255-268，建帛社，東京（2007）
14）岡村清子：定年退職と家族生活．日本労働研究雑誌，67-79，東京（2006）
15）木下康仁：ライブ講義 M-GTA- 実践的質的研究法　修正版グランデッド．セオリー．アプローチのすべて．初版．弘文堂，東京（2007）
16）木下康仁：質的研究と記述の厚み．初版，弘文堂，東京（2009）
17）佐藤眞一：企業従業者の定年退職後の生きがい - 集団面接による質的分析 -．明治学院大学論叢 心理学紀要 11 号：42-46（2001）

The Meaning of Social Participation to Married Women who Have Experienced Mandatory Retirement

Taeko Fujiwara
(Institute of Aging and Development, J. F. Oberlin University)
Hidehiro Sugisawa
(Graduate School of Gerontology, J. F. Oberlin University)

Keywords: Female mandatory retiree, Social participation, Community relation, Family relation, Married women

The purpose of this study is to clarify not only the meaning that women who had the experience of mandatory retirement or early retirement gave to their social participation, but also the process of assigning this meaning. In this study, semi-structured interviews were conducted with seven women, and the recorded data were analyzed by the Modified Grounded Theory Approach. The results are described below. The symbol “” shows categories and the symbol ‘’ shows subcategories. Both consciousness of “participation with community in mind” composed by ‘activities as the norm’ and ‘activities as a place of return’ and ‘freedom from family’s chains’ in “participation with family relations in mind” contributed to promote social participation. On the other hand, ‘not bothering family’ in “participation with family relations in mind” was related to reluctance to engage in social participation. “Participation with family relations in mind” was influenced by “working with traditional family relations in mind” in past working careers and “participation with community in mind” was related to “weak involvement in community activities” in past working careers.